

同朋大学“いのちの教育”センター講座一覧

連続いのちの講座 テーマ “いのち”の教育 会場 Do プラザ 閲覧無料

5/19(木) 17:00～18:30
親鸞聖人の人間観

講師 太田清史 (本学 学長)

9/8(木) 17:00～18:30
「生物学的いのち」と「本当のいのち」

講師 高柳正裕氏 (元・大谷派教学研究所 所員/本学 非常勤講師)

10/6(木) 17:00～18:30
〈毒婦〉という教育

講師 眞有澄香 (本学 文学部 教授)

11/24(木) 17:00～18:30
インクルーシブ・ダイビング — 障がいのある人とともにダイビング —

講師 下山久之 (本学 社会福祉学部 教授)

1/12(木) 17:00～18:30
育ちの根っこ — 障害乳幼児の地域療育 —

講師 藤林清仁 (本学 社会福祉学部社会福祉学科 専任講師)

所員

センター主幹：浅野 玄誠 (文学部人文学科 教授)

所員：田代 俊孝 (文学研究科 教授)

所員：木野美恵子 (社会福祉学部 教授)

所員：森村森鳳(張 偉) (文学部人文学科 准教授)

所員：石牧 良浩 (社会福祉学部 社会福祉学科 准教授)

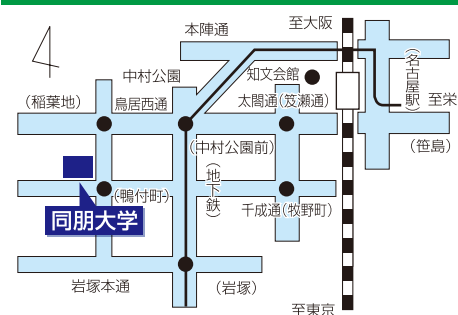
お問い合わせ先

同朋大学 “いのちの教育” センター

〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1

☎ 052-411-1373

同朋大学 周辺地図



交通 市バス/栄又は笹島より②系統稲西車庫行、鴨付町下車
地下鉄/中村公園より③系統稲西車庫行、鴨付町下車

ISSN 1340-8070



INDEX

| | |
|-------------------|---|
| 巻頭エッセイ | 1 |
| シリーズ(福祉にみる“いのち”②) | 2 |
| コラム「人間を考える」③ | 3 |
| 2016年度講座案内 | 4 |

同朋大学 “いのちの教育” センター
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
TEL 052-411-1373
Eメール宛先 inochi@doho.ac.jp

● 同朋大学 “いのちの教育” センターだより

任期満了にともない、2016年4月より、“いのちの教育”センターの構成員を一新いたしました。新しいセンター主幹には浅野玄誠(元・同朋大学学長)が就任したほか、所員も一部、メンバーが入れ替わりました。詳しくは最後のページの「所員欄」を御覧ください。この新体制のもと、センターでは、今年度もひきつづき、「いのちの連続講座」を中心に活動を進めてまいります。皆さま、今後ともよろしくお願いたします。

2016.7.30 NO.44

“いのち”の教育センターに寄せて

太田 清史

本年4月より同朋大学学長に就任いたしました、太田でございます。

先日の連続講座では、私自身が永遠の過去(無量寿)・無限の彼方(無辺光)からの大いなるいのちの働きかけ、すなわち他力の働きかけを受けて、無条件に生かされている存在であることに気付かせていただいた経緯をお話しさせていただきました。

本学の“いのち”の教育センターの活動は、浄土真宗の宗祖親鸞聖人によって発見された、時空を超えてすべてのいのちを生かそう生かそうという“アミダなるいのち”の意味と広がりを受止め、そういう命の連鎖、いわばヒューマン・チェーンをあらゆる分野でどこまでも広げていこうということにあります。そして傷付いた命に苦しむ人々に対しては、その苦しみを分かち合い、本来の光輝くいのちのともしびを回復させることに共働するこ

とが、主な活動です。

同朋大学“いのち”の教育センターは、従来の浄土真宗のお寺が担ってきた役割を、大学の中に開設したものといえます。

ふと自分の生き方に迷った時、また家族の心身の苦しみに直面した時など、折にふれて“いのち”の教育センターを訪れていただければありがたいと思います。

(本学 学長)



(第1回講座の様子)

「いのち」が輝き始めた瞬間

石牧 良浩

私は、臨床心理士養成の大学院に通い始めた頃、臨床心理士はクライアントさんを「治す」のが仕事であると考えていた。大学院の附属相談室での実習や、学外の実習でクライアントさんとかかわりをもったが、全く「治せている」実感は得られなかった。クライアントさんが「治る」とはどういうことなのだろうという疑問は頭の片隅にあったが、いつしか授業や修士論文の執筆で忙しくなり、深く考えないようになっていた。

その後、大学院のカリキュラムが進んでいく中で、授業で精神分析的心理療法に触れ、「平等に漂う原則」という概念を学んだ。また、カール・ロジャーズの「クライアント中心」という考え方も学んだ。これらは、相手の言葉に対して、こちらが何かをしてあげようと動かされてしまうのではなく、相手が何を言いたいのか、何をしたいと思っているのかに耳を傾け、そうすることで相手自身を分かっている姿勢と関連することが分かってきた。大学院の修士課程を終え、現場に出て何年かたった頃には、クライアントさんを「治す」ということではなく、「分かる」ということ、「分かろうとすること」の方が大切なのだということに気が付き始めた。「ああそうか」、「そういうことか」、「この人の苦しみはこういうものだったのか」という実感を、私自身が得られるような面接を心掛けるようになった。クライアントさんを分かろうとすると、自然と彼らの変化にも気づけるようになり、面接がうまくいくようになった。面接の中で、様々な状態のクライ

アントさんに全力で「寄り添う」ことも臨床心理士の大切な仕事なのだを学んだ。いろいろなことが分かってくるにつれ、元気を取り戻して面接を終結するケースも増えてきたが、駆け出しの大学院生の頃に抱いていた「治る」ということについての疑問は長く残っていた。

その疑問について、大きな示唆を与えてくれた人がある。その人は、周囲になじめず、何年も社会的引きこもり状態に陥っていた人であった。数年間の面接を経て、状態がだいぶ良くなってきたように見え、もうそろそろ終結を考えようと思っていた頃、彼は満面の笑みで私にこう言った。「僕は、これまで周りになじまないといけないと思っていた。でも人間関係に入っていくとすればするほど浮いてしまって、とてもつらかった。でも、これからは『なじめないキャラ』としてなじんでいこうと思う」と。ああそういうことなのか、と思った。彼は何よりもまず、他の誰でもない「自分自身」として生きようとするようになったのだと思った。彼から一切の卑屈さが消え、一挙手一投足に、発せられる言葉一つ一つに力強さが宿っていた。彼の内面で停滞し、くすぶっていた「いのち」が輝き始めた気がした。大きな感動であった。「治る」とは、そういうことなのかと思った。

そのときのことは忘れない。一度でも多くこういう瞬間に立ち会えるよう、日々努力していきたいと思っている。

(本学 社会福祉学部 社会福祉学科 准教授)

視点を変わると見えてくるものとは？ 『魔女の宅急便』を通して考えてみる

ブレニナ・ユリア (BURENINA YULIA)

昨年のコラム（安藤弥先生の『もののけ姫』に〈仏教〉を読む）に引き続き、宮崎駿のアニメ映画に焦点を当て、視点を変えることの大切さについて考えてみたい。

平成元年の1989年に公開されたスタジオジブリの長編アニメーション『魔女の宅急便』は私の大好きな作品である。主人公のキキは、魔女の血を受け継ぐ13歳の女の子で、「魔女のいない町を見つけて定住し、魔女の修行を積むべし」という古くからのしきたりに従って旅立ち、綺麗なく海に浮かぶ街〈コリコ〉にたどり着く。そして、パン屋に住み込みで働きながら空飛ぶ魔法をいかして品物を配達する〈魔女の宅急便〉を開業する。

様々な出会いと困難を経験し成長していく物語の中で、私がずっと気になっていたところがある。これまでに人間の言葉を話せたキキの相棒・黒猫のジジが急に会話できなくなってしまった場面である。一般的に考えられた理由としては、ジジが白猫のりりに恋をして変わったから、あるいは、キキの魔力が弱まったからである。

しかし、監督の宮崎駿が語った本当の理由は「ジジの声はもともとキキ自身の声で、キキが成長したためジジの声が必要

なくなった。変わったのはジジではなくキキ」というものであった。つまり、黒猫のジジはもともと人間の言葉を話していたのではなく、精神的に幼かったキキが、自身の別人格を猫のジジに投影していたのである。そして、魔女のキキの心の成長とともに擬似的に話せる想像の世界の友達（ジジ）が必要ではなくなったということになる。キキとジジの会話が自分との対話を意味するものであったとわかった時に、視点が変わり、この作品の世界観が違って見えてきたのである。

愛情ある家庭に育ち、自分の可能性と才能に絶対の自信をもっていたキキは、いざ社会に出ると打ちのめされ、無力感に囚われ、自分を信じられなくなった。しかし、自分の心の声（ジジの声）を支えに、様々な困難を乗り越え、自分にできることとできないことを学び、成長した。こういった経験は誰もがするであろう。視点を変えて魔女のキキの成長物語をあらためて見れば、困難な時こそ、自分を自分の味方につけることが大事であることに気づくのではないだろうか。

(本学 文学部人文学科 専任講師)